# 僕は何度でもピアノを弾こう。

kaluha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕は何度でもピアノを弾こう。

【Ｎコード】
Ｎ８０４９Ｋ

【作者名】
ｋａｌｕｈａ

【あらすじ】
マリに初めて会った時、彼女はその美しい目に涙をいっぱい溜めて僕を見て、僕を通りこしてもっと遠い場所を見ていた。――シュンは、放課後の音楽室でとびきり変わった少女と出会う。その日から始まった、放課後のシュンとマリの密かなピアノの特訓。シュンはだんだんとマリに惹かれていくが……。音楽と共に進むファンタジー色たっぷりの恋愛小説。

# 第一話

マリは美しい瞳をした女の子だった。

けぶるように睫毛の長い、切れ長の大きな目で、しかし何よりもその真ん中にはまった双眸が、いつも僕の心をとらえて離さなかった。

マリに初めて会った時、彼女はその目に涙を溜めて僕を見て、僕を通り越えてもっと遠い場所を見ていた。

放課後の、誰もいない音楽室で、僕は一人ピアノを弾いていた。

暑い夏の一日だった。

古くさい木製の窓枠にはまったガラスから西日の差す、オレンジ色のあの夕暮れのことを、僕は今でも一枚の絵画のように思い出す。

「光が……溢れてる。」

僕はピアノを弾く手を止めて、ふらりと現れた少女を訝しげに見返した。

彼女は音楽室の入り口に突っ立っていた。

灰色のプリーツスカートと白いブラウスから伸びた、すらりとした長い手足と、腰のある豊かな黒髪。

僕は耳を疑った。

今この子、何か言ったか？

この子が言ったのか？

涙が一粒、耐えかねたようにこぼれ落ちる。
音が止まったのに気づいたのか、彼女ははっと我に返ったようにたじろいで、涙を拭いた。
「ごめんなさい、私ちょっと、感受性が強くて…」
彼女はそんなようなことを言って、ごまかすように笑顔を浮かべた。
変なやつ。
僕は、あまりのことになんと返していいのか分からなかった。

「すごく上手ね、ピアノ。」
「え……、ど、どうも。」
僕は戸惑いながらようやく答えた。
「今の曲、海の曲？」
海の曲……？
「いや、……海って言うか……舟歌だよ。ヴェニスの、水路を渡っていくような。」
「そう、舟歌……。でも、君のは海だね。夏の海。光がいっぱいの。」
僕はますます戸惑ってしまった。
変な子だな。顔はわりといいのに。
たまにこういう夢見がちで少女趣味な女の子っているもんだよな。
「いつもここで弾いてるの？」
「え、まぁ……家に帰るとやらないからね。放課後、学校で勉強するみたいなもんだよ。」
僕はその時、夏の終わりに予定されているピアノ教室の発表会に向けて練習をしていたのだった。
ピアノは嫌いじゃないが、家に帰ればテレビとか漫画とか、誘惑がたくさんあるから、どうしても弾くようにならない。

「また、聴きにくるね。……あなたのピアノ、すごく素敵。」
そう言って微笑んだ彼女は来たときのようにふらりと去っていった。

“あなたのピアノ、すごく素敵”？
よくもそんなセリフをあんな風に悪びれもせず口に出来る高校生が今日びいるものだ。聞いているこっちが居た堪れない気持ちになる。
また聴きにくると言っていた。
僕は少し、困ったな、という気がしていた。
でも、彼女の不思議な瞳と、可憐な姿に惹き付けられないものがないわけでもなかった。
かわいい女は得だな、と思った。

翌日、学校の廊下で、彼女を見かけた。
彼女は数人の女友達と楽しげに話をしながら歩いていた。
僕はその姿に釘付けになった。昨日はそれほどにも思わなかったが、日常の中で、一般的な女子高生たちと比べれば、彼女はかなり可愛かった。
僕は再び戸惑ってしまった。
昨日、ピアノを聴いて、涙を流してわけの分からないことをつぶやいていた彼女と、同一人物には思えないほどだ。

「あの子、なんて子？」僕はとっさに隣にいた友人に耳打ちした。
「え？あの髪が長いやつ？5組のマリだろ。かわいいよなぁ。」
マリ。
彼女は僕と同学年の、二つ隣のクラスの生徒だった。

## 第二話

その日の放課後、僕は週に三日しかない軽音楽部の練習をさぼって、音楽室へ向かった。

授業が終わってわりとすぐに来たつもりだったのに、音楽室のグランドピアノには先客がいた。

僕は少し落胆しつつ、グランドピアノを諦めて、教室の後ろの壁際に寂しく置いてあるアップライトのピアノを開けて弾いた。

マリが来ることを願って。

果たしてマリはやって来た。今日は泣いていない。

「シュンくん、ちょっと。」

マリは音楽室の外から手招きをした。

マリは僕の名前を知っているのか。そう思いながら僕はピアノを弾きさして彼女のもとへ向かった。

「場所、変えない？」

「は？」

なんのことを言っているのだろうと、またもやどぎまぎさせられて、でも僕は彼女について行った。

そこは視聴覚室と呼ばれる教室だった。

スクリーンと、スクリーン並みの大きさのあるテレビと、整然と並ぶ机と椅子。

その片隅に、たしかにグランドピアノがあった。

こんなところにピアノがあったなんて、今まで気が付かなかった。

「私、音楽が混じるの、ダメなんだよね。だから、音楽やりたかっ

たけど、やらなかったの。……っていうか、やれなかったのよね。吹奏楽とか、コーラスとか。」
「混じる……って？じゃあ、あれ？絶対音感かなんかなの？」
絶対音感を持つ人は、日常の音でもそれを音階の中の音としてとってしまって、音と音がぶつかって気持ち悪いのだと聞く。
「うん、……まぁそんなようなものね。私のことはいいから、弾いて。ここなら心置きなく弾けるでしょ。」
マリは細い腕を後ろ手に組んで、軽く首を傾げるようにしてそう促した。
君が居る時点で心置きなくはないんだけど……。そう思いながらも僕は弾いた。

正直自分のピアノを褒められるのは初めてだった。
小学生の頃から長年ピアノを弾いてきたが、それほど練習熱心でもなく、遊びのような僕のピアノは、音大に行く人たちのそれのようにスキルが高いわけでもなく、つまり完全な趣味で、特に人の心に響くようなものではない、と思っていた。
でも彼女は、一番近い椅子を引き寄せて座り、心地よさそうにいつまでも僕のピアノを聴いていた。
彼女が音楽に合わせて体をゆったりと揺らすたびに、長い黒髪がさらさらと揺れていた。

「部活があるからさ、今度は金曜に弾きにくるよ。だから、よかったらまた、聴きに来て。」
僕は少しいい気になって言った。
「分かった。ありがとう。」
マリは、軽くうなづいてそう言った。

いったい僕のピアノのどこがそんなにいいのだろう。
マリが飽きもせず小一時間も僕のピアノを聴いていたことがほん

とうに謎だった。

しかし彼女は、それから、毎週金曜日に必ず放課後の視聴覚室へ僕のピアノを聴きにくるようになった。

そして僕の方は、家へ帰っても一層練習をするようになった。

彼女によりよいピアノを聴かせてやりたかったからだ。純粋に、そのことだけに精一杯だった。

なぜなら、彼女も僕のピアノを聴くことに精一杯だったからだ。

彼女はいつも、その瞳を輝かせて僕のピアノを聴いていた。

そんなとき、僕は一層その不思議な美しい瞳に惹き付けられた。

「夏の匂い。」

「海の香りがする。」

あるとき彼女が思わずと言ったように、声を震わせてそう言った。

初めて会った時つぶやいたような、夢見る少女の口調だった。

彼女は時折こうやって、むやみに詩的なことを言う。

「シュン、本当だよ。シュンがうまくなる度に、どんどんリアルに感じられるの。夏の海、夏の光が。」

# 第三話

マリと出会ってから一月半、週に一度の「ピアノの時間」をちょうど4回経験して、夏休みに突入した。
僕とマリは相変わらず金曜日の、しかし放課後ではなく朝の涼しい時間に秘密の練習会を続けた。

僕はますますうまくなり、ピアノ教室での評価もすこぶるよかった。
最近シュンは練習熱心だと、教師にほめられたものだ。
はじめは彼女の扱いに少々戸惑い気味だった僕も、その多少風変わりな部分にも次第に慣れていった。

あるとき僕は、軽音楽部のライブにマリを誘った。
「シュンくん、ドラムもやるんだよね。初めて聴く。絶対行くね。」
彼女は快く承諾してくれた。

夏休み中に企画されているライブには、必ずマリを誘おうと心に決めていたので、僕はピアノと同じぐらい、軽音の練習にも力を入れていた。
いつも部活が終わるとさっさと帰ってしまう僕が、珍しく遅くまで残ってドラムを叩いている姿を見て、バンドメンバーも驚いていた。

「シュン、昨日も一人で朝ドラム叩いてたらしいじゃん？どういう風の吹き回しだよ？」
バンドメンバーのケイタが不思議そうに聞く。

「いや、来年は俺らも受験だろ？バンドに力入れられるのって、今年ぐらいなんだなーって思ったら、ちょっとやる気出てきちゃって…」
苦し紛れの言い訳だったが、半分は本心だった。
「来年は今年ほどは練習できないんだ。最後だと思って、頑張ろうぜ？」
僕は現金にも、そんな柄でもないようなことを口走っていた。
実は目当てがマリだなんてこと伝えたら、怒られるだろうけど。
「そうだよなー。……よしっ！俺も今日は残って練習付き合うわ。」
「マジ？」
ギターボーカルのケイタは真面目でいい奴だ。楽器の実力としてもメンバーの中で飛び抜けてうまいから、何かと頼ってしまう。
僕は心の中でゴメン、と手を合わせながら、ケイタに付き合ってもらった。

僕とケイタにそういう流れが出来ると、自然と他のメンバーもなんとなくやる気を出してくれて、バンドはすごくいい雰囲気で進んだ。

「彼女、来るんだろ？」
ケイタの言葉に、ギクリとしてその顔を見る。
「ん、たぶんね。今回はちょっと良い出来になりそうだから、呼んでみた。」
はにかむような顔をしてぶっきらぼうに答えたのはベースのマサトだった。
なんだ、マサトに言ったのか。
「そっか、他校の子だっけ？マサトの彼女って。」
僕は心の動揺を抑えながら、さりげなく話を合わせた。
「こいつ、やりおるよなー。噂によると結構可愛いらしいよ。」
「いいじゃんいいじゃん。そりゃ、しっかり練習しなきゃだな、マ

サト。」
僕はさりげなくちゃっかり発破を掛けておいた。ベースのマサトが頑張ってくれないと、完成度が上がらない。

じつは俺も…、と、喉元まで出掛かった言葉を、僕は飲み込んだ。
僕はマリとのことを誰にも話していなかった。
一週間に一度、空き教室でピアノを聴かせる。こんな奇異な関係を、誰かに話すことなどできようもなかった。
別に付き合ってるわけじゃないし、「五組のマリが俺のドラムを見に来るんだぜ」って吹聴して回るのも、何か違う気がした。
僕とマリの関係は、何か、そういうのとは違うって気がする。
もっとイノセンス……って言うと気持ち悪いけど……、好きだとか嫌いだとか、友人同士で噂し合って、告るだの告らないだの、そういう話題にしてしまうのは、違う気がする。
だったら何なのだ、と聞かれても上手く説明できないのだが。

# 第四話

ライブは近隣の高校のバンドも数バンド出演するもので、ライブハウスは観客で一杯だった。
僕はステージ上でセッティングをしながら、その中にマリの姿を探した。

フロアの真ん中あたりに、すぐにその姿を見つけた。

今日のマリはライブハウス仕様だった。
いつも背中に流している長い髪をポニーテールにまとめて、耳には銀のわっかが付いている。
よく考えると、僕は今までマリの私服姿を見たことがなかった。
制服を着た清楚なイメージとは全然違う。
女の子ってすごい。

そんなことを考えながら彼女を凝視していたら、当然目が合う。
マリはにこりと笑って、小さく手を振った。
そこだけスポットライトで照らされてでもいるかのように、僕の目にマリの笑顔がくっきりと残った。
僕は誰かに見咎められやしないかどきどきしながら、ぎこちない笑みを作って、軽くうなづき返した。

僕は一人で緊張していた。
マリはライブハウスは初めてだと言っていた。
音楽が混じるのがダメ、と言っていたデリケートな彼女が、このような場に来て平気だろうか。

ライブが始まる。
僕は気を落ち着かせてカウントを出した。いつも通りやればいい。
練習は十分やったし、ミスさえしなければ普通にやってまず失敗することはない。

練習でなかなかうまくいかなかったベースの入りのフレーズが、しっかりと合う。
滑り出しは良好。

ノリのいい観客達は音楽に乗せて思い思いに体を揺らしている。
二曲目はとくにテンポの速い乗りやすい曲だった。
僕はスティックに力を込めて、ドラムを思い切り響かせた。

今日は上手く行きそうだと思っていた。
今年の夏は、これまでにないほど練習に力を入れてきたのだ。

だけど、僕はマリの姿を見てギョッとした。

マリは、揺らめく観客たちの狭間で凍ったように身をすくませて、微動だにしなかった。
その姿は、大海原にぽつんと立った孤島のように、一人明らかに浮いていた。

三曲目に入る。マリは身を硬くしたまま目を閉じてうつむいていた。
僕は不安になってきた。

なぜだ？

特に僕らの演奏にまずいところがあるとは思わなかった。
他の観客はみんな楽しんでいる。
なのに、マリだけはまるで苦行にでも耐えているかのようだった。
僕は彼女を誘ったことを次第に後悔し始めていた。

いいよ、辛いのなら聞かなくても。
僕はたたきながら、マリにそう叫びたい気持ちになった。
今すぐ演奏をやめたかった。
しかしさすがにそれはできなかった。

僕は気もそぞろな中、全五曲をやっとのことで終えた。

# 第五話

「おい、シュンどうしたんだよ。途中から、何か変じゃなかったか？」
楽器を片付けていると、さっそくベースのマサトに声を掛けられた。
「うん、いつもお前は冷静なのに、今日はイマイチだったね。なんか緊張してた？」
ケイタにも言われてしまう。
「ごめん……。」
やっとのことで、そう答えた。
仲間の声が耳に痛かった。
みんなに申し訳ない気持ちと、マリのことと、全身が絶望に包まれて、恥ずかしいんだか悲しいんだか、何がなんだか分からない状態だった。

「俺、ちょっと外出てくるわ。」
僕は仲間に悪いと思いつつ、控え室を飛び出して客席へ向かった。
惨めな気持ちでいっぱいだったが、でも、とにかくマリに会わなければ、と思った。

マリはどこにいったろう。
さっきまで居たはずの場所に、彼女は居なかった。客席を見回すが、それらしい姿は見えない。
僕はライブハウスの外へ出た。

祭りの喧騒を離れたような静けさの中、ライブハウスの外には、ちらほらと人が居た。

今出てきた人、これから入る人。対バンのメンバーらしき人達。
マリは…。

「マリ！」
彼女はライブハウスの隣の建物の壁際、薄暗い闇の中に目立たないようにうずくまっていた。

「どした？ライブハウスで、気分悪くなった？」
僕はおそるおそる聞いた。

「……ひどい。ダメ。ぜんぜんダメ。」

「え？」
彼女の激しい口調は僕の胸を突き刺した。
「音がバッラバラだよ。絵が、色が、ぐちゃぐちゃで、もう見てられなかった。」
彼女は責め立てるように言った。
僕は思わずかっとした。
「俺達の演奏が、バラバラだったって？ぐちゃぐちゃだって？どこが悪かったんだよ、具体的に言ってくれよ。他の客はみんな満足してた！」
マリの感覚が異常なんだ。
初めてバンドサウンドを聞く者に、何が分かるって言うんだ。
俺たちが、どんだけ練習してきたと思ってるんだ？
「お前、変だよ。いっつもそうやって分けわかんないこと言って。」

マリははっとしたように僕の顔を見て、涙を浮かべながら言った。
「そうだよね、ごめん。」
急に謝られて、僕の怒りは行き場を失ったようにたじろいだ。

「シュンー何やってんだ？」
この声はケイタだ。
僕は、この場をどう取り繕おうか必死で考えた。
女と二人きりである上に、彼女は泣いていて、しかもそれがマリと来てる。
万事休すだ。
「ごめん。私、帰るね。」
マリは立ち上がって、さっさと歩き出した。
僕はどうしていいか分からず、彼女を止めることも出来ず、ただその後ろ姿を見送った。

バンドのみんなにはさんざん冷やかされたが、その場は適当に誤魔化した。
僕は途方に暮れて、マリをライブに呼んだことをひたすら後悔するだけだった。

# 第六話

きっとマリはもう来ない。
そう思いながらも、次の金曜日が来ると、僕は学校に向かわずには居られなかった。

せみの声がうだるようだ。
自転車をこぐ僕の額から、汗が噴き出した。

マリは、僕がどんなに早く着いても、いつも必ず僕より先に視聴覚室へ来ていて、決まってピアノに近い、最前列の右から5番目の席に座って待っていた。
清潔な白いブラウスと、灰色のプリーツスカートをはいて。

案の定、マリの特等席は空だった。
誰も居ない教室は突き抜けるように空虚だった。
いつもはこの空間を、音楽と、マリの、歌うような言葉と笑い声が満たしてくれていたのだ。
僕は心が重く暗い空気に満たされるのを感じた。

僕とマリの接点は金曜日の視聴覚室だけだった。
僕はマリの日常を何も知らない。
どこに住んでいるのかも。携帯の番号すら知らないことに気づいてしまった。せめて電話番号ぐらい聞いておくのだった。もう、これきりか。新学期が始まるのを待つしかないのか。

僕は空虚さに耐えられず、ピアノの前に立った。ピアノを弾いて

いれば、マリがやって来るかもしれない。
僕はグランドピアノの重い蓋を開けた。

マリだ。

僕は鍵盤に掛けてある紫色の毛氈のカバーの上に白いメモが載せてあるのに気づいた。マリは今朝、ここに来ていたのだ。

「日曜日、国立美術館の二階のホールに来て。
あなたが音楽を愛するのなら。」

さらりとした筆跡でたった二行の文が書かれていた。
なんて突飛なんだろう。
マリはいつも僕を戸惑わせる。

しかし、日曜日はちょうどよく暇だった。
僕はなんだか少々悔しい思いをしながらも、国立美術館へ足を運ぶことにした。

## 第七話（前書き）

注：作品中に登場する「共感覚」という言葉について。
以下はＷｉｋｉｐｅｄｉａからの引用です。

共感覚（きょうかんかく、シナスタジア、ｓｙｎｅｓｔｈｅｓｉａ，ｓｙｎ？ｓｔｈｅｓｉａ）とは、ある刺激に対して通常の感覚だけでなく異なる種類の感覚をも生じさせる一部の人にみられる特殊な知覚現象をいう。 例えば、共感覚を持つ人には文字に色を感じたり、音に色を感じたり、形に味を感じたりする。 英語名ｓｙｎｅｓｔｈｅｓｉａ は、ギリシア語で共同を意味する接頭辞 ｓｙｎ－ と感覚を意味する ａｅｓｔｈｅｓｉｓ から名づけられた。感性間知覚。

検索していただければ「共感覚」についての情報を掲載したサイトはたくさんありますし、「共感覚」についての書籍も出ていますので、詳しく知りたい方は調べていただきたいのですが……

作品中に出てくるマリの感覚は、実際の「共感覚」とは全く異なるものです。「共感覚」の持ち主が、音楽が上手いから綺麗なものを見る、感情が音に表れているからその感情を映像としてみる、などということはあり得ません。これは作者が「共感覚」にヒントを得た架空の能力であり、完全なる創作です。あくまでこの作品は「ファンタジー」ですので、架空の物語、現実には有り得ない話としてお読みください。

不快に思われる方もいらっしゃるかとは思いますが、あくまで素人の習作ということで、ご了承いただければと思います。

# 第七話

国立美術館の二階にホールがあるなんて知らなかった。
行ってみると、ホールとは名ばかりの、小さなステージと客席を持つ、ごくささやかなものだった。

まばらな客に混じって、マリが静かに座っていた。

僕は声を掛けることも出来ず、その後ろの席に腰を掛けた。
マリは振り返りもしない。
入り口で配られたパンフレットを見ると、地元の大学のサークルらしかった。

ステージ上には、ピアノと、ベース、ドラム、ギター。ジャケットとシャツ、と言うような、わりとかっちりとした服装を着た男の人達が楽器のセッティングを行っている。
パンフレットはすごくお洒落なのだが、プログラムとして載っている曲は、知らない曲ばかりだった。
洋楽？いったい、どんなジャンルの音楽なのだろう。

まもなく、十数名の若者がぞろぞろと現れてステージ上に列をなした。

音楽が始まる。
イントロは軽やかなピアノの旋律。そこにふわりと歌が乗る。
美しいハーモニーだった。ピアノの伴奏にのせて、男女混声の合唱。
やがてドラム、ベース、楽器が重なり、ぐっと音圧出る。
かっこいい。足のつま先から頭のてっぺんまで吹き上げるような

音の壁に、鳥肌が立った。

これが、マリが僕に聞かせたかった音楽か。

僕に合唱の造詣はなかったが、曲も洋楽の知らない曲ばかりだったが、何も分からないが、すごく惹かれた。

マリではないが、寄せては返す波のようだった。楽器の音と人の声と、何本もの糸が寄り集まって、一つのうねりとなって押し寄せる。

「これは、夏の風にそよぐ向日葵畑。一つ一つが力強くて、でもそれぞれが一つになって、同じようにそよいでいる。」

マリが言った。

「シュン、ほんとうなの。ほんとうに見えるの。音楽を聴くと、目の前に映像が広がるんだ。だからね、ばらばらの音楽を一度に聴くと、ばらばらの色がごちゃ混ぜになって、混乱しちゃうの。」

「シュンくん達のこないだの演奏は、一人一人が別々の物を主張していた。まったく一つになっていなかったの。だから、私には耐えられなかった。みんなが同じものを目指して寄り添いあっていれば、そこに一つの形を成して、ぼんやりと立ち現れる。だから、この人たちの音楽が私は好き。」

僕はどきっとした。

あなたのピアノ、すごく素敵。

初めて会った日のマリの言葉を思い出す。

そして、僕のピアノでは夏の海が見えると言うのか。

「“共感覚”って知ってる？音や数に色を感じたり、文字に味や匂いを感じる人がいることを？」

僕は首を振った。
「その一種なのかもしれないらしいんだ。変だよね。」

その日の夜、僕は“共感覚”という言葉をインターネットで調べてみた。
確かにそれは存在した。
知覚したものが、通常の感覚に加えて別の種類の知覚情報としても感覚される。文字に色を感じたり、音に色を感じたり、形に味を感じたりする。
そういう人が何千人かに一人の割合で存在するのだそうだ。

マリの場合は、音楽が頭の中で映像に変換されてしまうと言うのか。
でも、僕には到底想像が付かなかった。
音楽を視覚情報としてとらえる？
じゃあテレビを見るときはどうするんだ？映画を見るときはどうするんだ？
音楽を耳にするたびに、違うイメージが目の前にちらつくのだとしたら……。

吹奏楽とか、コーラスとか、やりたかったけどやれなかったのだと彼女は言っていた。
練習のたびにめまいがするような視覚情報の洪水、イメージの洪水に飲まれるのだとしたら、音楽の授業はどうするんだ。

僕は途方もない気持ちになった。
彼女はいったいどんな世界に生きているのだろう。

彼女のあの不思議な目にはどんな世界が映っているのだろう。

## 第八話（前書き）

注：作品中に登場する「共感覚」という言葉について。
以下はＷｉｋｉｐｅｄｉａからの引用です。

共感覚（きょうかんかく、シナスタジア、ｓｙｎｅｓｔｈｅｓｉａ，ｓｙｎ？ｓｔｈｅｓｉａ）とは、ある刺激に対して通常の感覚だけでなく異なる種類の感覚をも生じさせる一部の人にみられる特殊な知覚現象をいう。 例えば、共感覚を持つ人には文字に色を感じたり、音に色を感じたり、形に味を感じたりする。 英語名ｓｙｎｅｓｔｈｅｓｉａ は、ギリシア語で共同を意味する接頭辞 ｓｙｎ－ と感覚を意味する ａｅｓｔｈｅｓｉｓ から名づけられた。感性間知覚。

検索していただければ「共感覚」についての情報を掲載したサイトはたくさんありますし、「共感覚」についての書籍も出ていますので、詳しく知りたい方は調べていただきたいのですが……

作品中に出てくるマリの感覚は、実際の「共感覚」とは全く異なるものです。「共感覚」の持ち主が、音楽が上手いから綺麗なものを見る、感情が音に表れているからその感情を映像としてみる、などということはあり得ません。これは作者が「共感覚」にヒントを得た架空の能力であり、完全なる創作です。あくまでこの作品は「ファンタジー」ですので、架空の物語、現実には有り得ない話としてお読みください。

不快に思われる方もいらっしゃるかとは思いますが、あくまで素人の習作ということで、ご了承いただければと思います。

# 第八話

「シュンくん、またうまくなったね。」
次の金曜日、何もなかったかのように視聴覚室に現れた彼女は、うれしそうにそう言った。

「でも……ときどき、なんだか切ないものを感じる、シュンくんのピアノに。」
あるとき彼女は言った。
それは、ピアノの発表会を目前にした、夏休みも終わりに近づいたある日のことだった。

「シュンくん、もしかして恋してる？」

マリが突然僕にそんなことを言った。
僕はとっさに大きく首を振った。
「恋……？何でまた突然。」
僕は言いながら、自分の顔色が変わっていないことを祈った。
「嘘だよ。だって、ときどき女の人が見えるよ、髪の長い、」
「待て待て……っ！何だよそれ？そんな、具体的な映像も見えるわけ？海、とか花畑、とかじゃなく？」
僕は焦ってマリの言葉をさえぎった。
これはまずいことになったな、と思った。
「映像と言うか、そんな感じ、っていう程度なんだけど。……こんなことは初めてなんだけどね。シュンくんは特別なんじゃないかな？シュンくんがうまくなるたびにどんどんリアルになるんだもん。匂いを感じたり。」

「……弾いてよ、気になるから。」
マリは無頓着にそんなことを言う。
弾けるかよ、と思いながら、僕はこの事態をどうするか思い悩んでいた。

「ずっと、気になってたの。初めてシュンくんのピアノを聴いたときから。」
「初めて、聴いたときから……？」
「うん。夏の海と、夏の匂いと、女の人のイメージ。それがなんだか切なくて、綺麗で。だから、惹かれたのかもしれないんだけど。」
僕はぎくりとして立ち上がった。

夏の海と……？

「なんだよそれ……！？俺の、それが、俺の心の中なのか？それが見えるって言うのか？」
僕はたまらずピアノの蓋を閉めた。
僕の指がすべり、バタンッ、と激しい音をたてて重い蓋が落ちる。
「俺は……俺はもう、お前の前でピアノは弾かない！！」
僕は、ピアノを弾くたびマリの目の前に全てを曝け出していたのだろうか。
「待ってよ、シュンくん、待ってよ！」
僕は追われるようにその場を去った。
がむしゃらに自転車のペダルを踏みながら、僕の心はマリの言葉

に囚われていた。
夏の海。
そうだ。それは、僕の初恋だ。
中学3年の夏、十も年上の綺麗なピアノ教師が好きになって、一人で舞い上がって……僕がピアノを続けたのは、悔しかったからだ。まだ子どもの僕をからかって、でも、何度も好きだと言って、だって、僕はまる1年も彼女と一緒に居たのだ。それなのに、僕に何も告げず、突然綺麗な花嫁になってしまった。僕はピアノを止めなかった。だって悔しいじゃないか、彼女に捨てられたからピアノを止めるなんてこと。だけど……、
もうとうに忘れたと思っていた。なんで今更あんな奴が出て来るんだよ。未だに自分はあんな奴に囚われているのか、そんなものを、音に表そうとしていたのか、いったいなんで、マリにそんなものを見せなきゃならないんだ！

マリが悪いわけではないのは分かっていた。
でも、僕はもうとても視聴覚室へは行けなかった。
マリが音楽に映像を見るのだとしたら、それが演奏者の心を映すものだとしたら、彼女はいったいいくつの心を見てきたのだろう。けして美しいものだけではないに違いない。
彼女の目に映るものが見てみたいと思った。彼女が見る世界を見てみたいと思った。

そして、発表会は目前に迫っていた。

# 第九話

「シュンくん、恋してるでしょう？」
ピアノ教師のおばさんが、マリと同じことを僕に聞いた。
「何を突然。」
僕は苦笑いするしかなかった。
「恋と音楽は、とても相性がいいものよ。恋をすれば、音楽は格段にうまくなる。」
僕の場合はちょっと事情が違うんだけど。
しかしもちろん何も言い返せなかった。
「ほんとに、ずいぶん良くなったわよ。きっといい発表会になるわ。」

たしかにいい演奏ができるだろう。この夏僕は、なんとなくピアノを弾いていたのではなかった。
この夏僕には、マリというこの上ない教師が付いていて、いつもの僕からは信じられないぐらいに練習した。
でも、それもこの演奏で終わり。視聴覚室の夏も終わりだ。

僕はステージに上がり、熱いスポットライトを浴びた。

一礼をして、ピアノに向かう。
グランドピアノの黒い肌が、そして鍵盤も、ライトを浴びてまぶしく輝いていた。夏の、白い光か。
だけど、僕にとってこの夏は、光る白い砂浜ではなかった。
僕にとってのこの夏は、蝉時雨の降る蒸し暑い視聴覚室だった。

視界の端に、マリが座っていた。
やっぱり来たのか。僕はもう、マリの前でピアノは弾かないと言ったのに。

マリは綺麗だった。
暗い客席の端で、その美しい瞳を輝かせて、僕を見ていた。

僕は必死で指を動かした。願わくば、僕の心の内が、彼女に届くように。

気づけば、マリは泣いていた。

観客の数は知れてるから、拍手喝采とまではいかないけれど、客席のみんなが暖かい拍手を送ってくれた。

舞台袖から重い防音扉を開けて廊下へ出る。
客席へ戻る廊下を歩いていると、向こうからマリが走ってきた。
「シュンくん！」

マリは、清々しく晴れ渡ったような極上の笑顔で言った。

「ありがとう。」

「うん。」
その一言で充分だった。
僕は手放しで、マリを抱きしめた。
涙が出てきそうだ。

僕がこの夏、なんの為にピアノを弾いてきたのか、思い出した。

「シュンくんこれからも、ピアノ、聴かせてね。」

マリがくぐもった声でそう言う。

「うん。」

僕は何度も繰り返しうなづいた。

僕は、何度でもピアノを弾こう。僕のピアノが、マリにとって好ましいものを伝えることができるのならば。その笑顔を見ることができるのならば。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8049k/

---

僕は何度でもピアノを弾こう。

2010年10月8日15時04分発行